

# 無私の奉仕は運命を変える

T.G.クリシュナムールティ

それは1990年の7月29日のことでした。私はバンガロール(ベンガルール)から、妻と友人と共に車で旅行していました。私が車を運転して、妻が私の左に座っていました。友人は後部座席に座っていました。車はバンガロールからチッカバツラプルに向かっていました。チッカバツラプルまで約7キロのところ、一頭の水牛が道を横切るのが見えました。私はすぐにブレーキを踏みました。水牛は助かり、走り去って行きました。しかし、車は空中を4回転し、それから車輪を下にして着地しました。その狭い道の両側には、20フィート[約6.1メートル]の深さの溝がありました。その時、私たちの車の前後を行き交う人や車は全くありませんでした。車の屋根は吹き飛ばされ、車の中から空が見えました。妻に怪我はないか尋ねると、妻は体を調べて大丈夫だと言いました。友人にも同じことを尋ねると、彼も大丈夫だと答えました。私の右の鎖骨は折れていました。そのせいで、私は右手を上げることさえできませんでした。燃料タンクは満タンでしたが、車は爆発しませんでした。どうにか車を動かすことができました。牛車のようにゆっくりと車を走らせ、チッカバツラプルに到着しました。それから、ベンガルールにいる身内に連絡を取りました。当時は携帯電話がなかったので、私はベンガルールの身内に[固定電話で]電話をかけたのです。

車を見た身内の者たちは、誰も助からなくてもおかしくなっただろうと思いました。車は空中を4回転したのですから。彼らは、検査を受けさせるために私たちをベンガルールの医者へ連れて行きました。医者たちは私たちの体をスキャンする[CTやレントゲンなどで画像データを撮って精査する]ことを勧めました。私はあまり気が進みませんでした。妻も同様でした。友人も躊躇していました。私たちが生きるか死ぬかは神のご意志です。私たちの意志ではありません。私たちは体に頓着したくありませんでした。そう思ったので、チェンナイに戻って、そこからスワミに次のような電報を打ちました。「スワミ、私は事故に遭ったため、そちらに伺うことができません。できるだけ早くそちらに伺い、ダルシャンを受けるつもりです」。医者は私の骨折した箇所に包帯を巻いて、21日間で自然治癒するだろうと言いました。3週間後、私はプッタパルティへ行きました。

オベロイ大佐は、当時プッタパルティにあるシュリ・サティア・サイ空港の責任者でした。それ以前、彼はチェンナイにあるインド航空の統括マネージャーでした。その後、彼はスワミの帰依者になり、プッタパルティに留まりました。オベロイ大佐は私の友人でした。私がそこへ着くやいなや、彼は私を見て気遣う言葉をかけてきました。「やあ、T.G.K、事故のあとは大丈夫なのかい?」「何の事故だい?」私は驚いて尋ねました。「ほら、7月29日の月曜日、午前10時48分にひっくり返っただろう。車が4回転して損傷を受けただろう...」

大佐はすべての詳細を説明しました。事故のことは誰にも話していないのに、どうやって彼はこれらすべてのことを知ったのだろうと不思議に思いました。スワミにさえ、事故に遭ったこと以外に詳しいことは何も話していなかったのです。しばらく大佐にからかわれてから、どうしてそんなに詳しい内容を知っているのか尋ねてみました。すると、彼は説明してくれました。

「その日の午前 10 時 49 分、スワミが外へ出て来られたんだ。スワミは出て来ると私を呼んで、『君は、友人のクリシュナムールティを知っているでしょう?』とお尋ねになった。『はい、スワミ』と私は答えた。スワミは話を続けられた。『あの水牛〔「愚か者」という意味〕が、道で別の水牛を見て、ブレーキを踏んだのです。別の水牛は逃げて行きましたが、あの水牛は車の中で宙返りをしました。私は前後を行き交う車や人を止めて、同時に車が 4 輪を下にして止まるようにしなければなりません。でなければ、燃料タンクが満タンだったので、あの車は爆発するところでした。水牛め! 彼は車の運転の仕方も知らないのです!』」

私は少し恐くなりました。その後、ベランダに行って腰をおろしました。スワミが姿を現わされ、私をじっと見て、「具合はどうだね?」と尋ねるように両方の眉毛をつり上げられました。私はゆっくりと自分の鎖骨を見せました。まだ少し腫れていました。翌日、スワミはブリンダーヴァン〔バンガロールのアシュラム〕へ行かれる予定でした。スワミは私におっしゃいました。

「あなたもブリンダーヴァンに来なさい」。私はブリンダーヴァンへ行きました。

ブリンダーヴァンのホールには、450 人ほどの日本人帰依者たちが滞在していました。翌朝、ダルシャンの後、スワミは御講話のためにホールへおいでになりました。スワミは私にも話をしよう望まれました。私はいつも話をする時、『バーガヴァタム』の詩節を引用して、神を称賛したり神の栄光を讃えたりするのですが、そうしようと思って私が祈り始めると、スワミはおっしゃいました。「そんな話はやめなさい。車の事故について話さない」。そこで、私は事故の詳細を説明して言いました。「スワミが私の命を救ってくださいました。そうでなければ、私は死んでいたことでしょう」。即座に、スワミは返されました。「ノー、ノー、ノー! 私があなたの命を救ったのではありません」。私は尋ねました。「スワミ、それはありえないでしょう? あなたが私たちの命を救ったのではないなんて、誰が信じるでしょうか?」。するとスワミはおっしゃいました。

「私が嘘を言っていると思っているのですか? 私があなたを救ったのではありません。私は本当のことを言っているのです」。そこで、私はスワミに、ではどうして私が救われたのかを明らかにしてほしいと頼みました。するとスワミはこう説明してくださいました。「あなたは長年、プッタパルティに来てセヴァをしていました。プッタパルティの中だけではなく、地元でもしていました。人々があなたのセヴァに感謝するたびに、あなたはそれを無視して言いました。『どうか私ではなく、神に感謝してください』と。そういうわけで、すべての感謝はあなたではなく、私のところへ来たのです。なぜなら、あなたはいつも人々に『神に感謝してください』と言っていたからです。人々は間接的に私に感謝し、私はあなたの善行のすべての結果を私の元に貯金しました。あなたが人々に、『神に感謝してください』と言い続けるにつれて、その貯金は増え続けました。それ

は、あなたが神の霊性の銀行に霊性の口座を開いたことを意味しています。その資産は、あなたの善行の結果以外の何ものでもありません。例えば、もしあの日の事故の対価が 50 万ルピーくらいだとして、あなたが自分の口座に 100 万ルピーを貯めていれば、その貯金の残高が自動的にあなたを助けるのです。私は、あなたの善行の結果を管理している（霊性銀行の）管理人にすぎません。私が救ったわけではありません。あなたの善行の結果が、あなたを救ったのです。これが、私が最初から言い続けているセヴァの目的です。人は、愛と謙虚さにあふれ、どんな利己心（エゴ）も持たずにセヴァをしなければなりません。それらのセヴァは私の元へ届きます。シュリ・サティヤ・サイ・セヴァ・オーガニゼーションの真の目的はセヴァです。セヴァと奉仕には違いがあります。奉仕の場合、行為のあとで何らかの見返りを期待します。しかしセヴァでは、与えるのみで何の見返りも期待しません。このことから、善行をして、その善行の結果を神に捧げるなら、どのようにセヴァがあなた自身の運命を変えるかが理解できるでしょう」。スワミは次のようにもおっしゃいました。

「私の元へ来なければ、あなたはこれらの善行をすることはなかったでしょう。善い行いをするのがなければ、あの事故の日にあなたは死んでいたはずでした。したがって、あなたの善行があなたの命を救い、死は引き下がりました。ですから、このことを肝に銘じておきなさい」。

これが、日本人帰依者たち全員の前で、スワミが私にお話しになったことです。

※ 執筆者はタミル・ナードゥ州 シュリ・サティヤ・サイ・セヴァ・オーガニゼーションの元州会長  
出典：月刊 “Sanathana Sarathi” 2021 年4月号

